

事例研究のメタ的分析の試み

—複数セラピストの視点の共通性と心理療法プロセスのよみ方に着目して—

鈴木 優佳

1. はじめに

心理療法の過程では何が生じているのだろうか。具体的にどのようなことが展開し、何によって展開がもたらされるのだろうか。こうした、心理療法のプロセスについて、これまでに多くの関心が寄せられ、様々な角度から検討がなされてきた。心理療法のプロセスの検討が行われる理由には様々なものが考えられるが、その一つには、こうしたプロセスの理解を行うことで、心理療法を専門として行うわれわれが、自らの行う作業を見つめなおす機会となることである。心理療法とは、セラピストも意図しない展開をすることがあったり、誰にでも当てはまる汎用性のあるセオリーなど存在しなかったりする特徴を持つものであるため、心理療法を行うセラピストにとっても、そこで生じていることを述べることは非常に難しいものであると言える。また、もう一つの理由として考えられることは、われわれ自身の専門性を説明することにつながるからである。自分たちがどのようなことをしているのかを一般の人たちに納得できる言葉で説明することが求められている（氏原，1995）と言われるように、心理職の活動が多面化・拡大化していく近年の動向に伴って、われわれの仕事に対する説明責任が、社会的に求められていると言える。

2. 問題と目的

これまでに様々な角度から、心理療法のプロセスの理解が求められ、検討がなされてきたが、その方法の一つに事例研究がある。心理学研究法について概観した山川（2014）によれば、欧米では定量的な研究が中心を占めるものの、わが国では心理臨床の実践に資する事例研究を中心に検討が行われてきたことが指摘されている。その背景にあるのは、「事例研究とはセラピストクライアント関係を含んだ全体としてのゲシュタルトであり、このことが事例研究を個別事例の報告に留まらずに、普遍性や一般性を導き出すことを可能にする」（河合，1981）という考え方である。つまり、個別性をもつはずの事例の過程を深く検討することで、一事例が単なる一事例にとどまらず、そこには普遍性が見出されると考えられてきたのである。

また、このようにわが国で多数の事例研究が行われてきたことに着目して、岩壁・小山（2002）は、事例研究のメタ分析という新たな手法を提案している。そこでは、「心理的変容と関係する作業をさまざまな事例から抜き出すことにより、効果的な過程についての共通理解が深まる」と考えられている。また、永山ら（2013）も心理療法的アプローチによる複数の発達障害の事

例から、「関わり方」と「寄与しうる点」を抜き出して検討する「事例のメタ分析」を行い、成果を上げている。このように、事例のメタ分析という手法は、心理療法のプロセスで生じていることを検討するための一つの手段となりつつあると考えられる。

だが、そもそも事例研究によって導かれるとされる「普遍性」とはどのようなものだろうか。藤原（2004）によれば、事例研究法という事例とは、「客観的な問題行動や症例そのものという意味を越えて、その行動や症状の背後にある主体の内面的な心の機能に注目した固有のアプローチを示唆する」と言われている。そのため、事例研究を通して導き出される普遍性とは、「単純に他の事例にも一律の適用可能性をもつという意味ではなく、内面的な主体機能という個人的で主観的な心の動きに関する事実が、他の事例へのアプローチに普遍的な仮説機能をもつといった意味である」と指摘されている。

このような観点からすると、事例研究を通して事例のプロセスを検討する際には、「内面的な主体機能という個人的で主観的な心の動きに関する事実」から「他の事例へのアプローチに普遍的な仮説機能」を読み取っていく、セラピストの視点がおのずと含まれていると考えられ、加えて、その視点にも何らかの共通性があるという前提が成立すると考えられるだろう。しかし、これまでの研究で、このようなセラピストが事例をみる視点については十分に検討されてこなかったとされている。高嶋ら（2008）でも「事例をみる『視点』そのものを対象とした研究はほとんどなされてこなかった」ことを指摘し、事例を読み取る際の心理臨床家と教師との「視座」の違いを検討している。ここでは、仮想の事例概要の書かれた質問紙を用いて検討した結果、事例情報の着目の仕方に職種ごとの特徴が現れたことを報告していることから、心理臨床家に固有の視点が存在する可能性が示唆されていると言える。だが、事例のプロセス全体に関して、事例をみる「視点」そのものを対象とした検討はいまだなされていない。

そこで、今回は事例研究を通して、次の二つの手順で心理療法のプロセスに関する検討を行う。まず一つ目として、複数の異なる学派のセラピストが、同一の事例報告を読んで考察をした公刊事例を分析対象として、「セラピストはどのように事例のプロセスを読んでいくのか」という切り口から、セラピストの視点の共通性の検討を行うことを目的とする。続いて、同様の公刊事例を分析対象として、共通性のみられたセラピストの視点を参考に、「心理療法の過程ではどのようなことが生じているのか」という切り口から、事例のプロセスについてのメタ的な分析を行うことを目的とする。これら二つの検討から、心理療法のプロセスを理解するための手がかりとなる新たな可能性や展望を探ることをこの研究全体の目的とする。

3. 方法

1) 分析対象とする文献

出版されている文献『事例に学ぶ心理療法』（河合，1990）の中に収録されている事例を対象とする。その理由は次の通りである。『事例に学ぶ心理療法』（河合，1990）は、一つの事例に対して複数の異なる学派のセラピストがコメントをして、その事例のプロセスを検討する試みを行ったものである。このように、同じ事例に対して複数の異なる学派のセラピストがコメントを行う試みはほとんど例がなく、稀有な取り組みであると考えられる。だがこうした取り組みにも関わらず、その共通性や相違性には言及されてはいない。そこで、今回、セラピストは

どのように事例のプロセスを読んでいくのか、またその際に複数のセラピスト間での共通性はどこにあるのかということを検討するには適した文献であると考え、用いることとした。

2) 分析対象とする事例

『事例に学ぶ心理療法』には全部で7事例が収録されているが、次のような理由から、2事例を対象とした。まず、今回の検討では事例のプロセスの検討を目的としているために、実際に心理療法を担当したセラピストが、事例のプロセスについて考察しているものを選択したところ、3事例にしばられた。その他の4事例は、他のコメンテーターへの返答であったり、事例の一部のみを考察しているものであったりしたため、今回の検討には適さないと考えられた。さらに、その3事例のうち2事例は事例のプロセスのみが書かれた段階で他の学派のセラピストの方々がコメントをする形式となっていたが、残りの1事例は担当セラピストの考察が書かれたうえで、他の学派のセラピストの方々がコメントをする形式であった。今回は、事例のプロセスを読んでいく際の共通性の検討を目的の一つとしているため、事例のプロセスのみが書かれた段階で他の学派のセラピストの方々が検討したものを対象にする方が望ましいと考えられた。そこで、今回対象とした事例は、以上の流れにより選択された2事例「I君とのプレイセラピー」、「学校恐怖症——M君の場合」とした（以降、順に事例A、事例Bとする）。

ここで簡単に、事例の概略を述べておく。事例Aは、田中和子氏と7歳男児のクライアントI君によって行われたプレイセラピーである。自閉症の診断を受け来談し、全25回を経て終結している。他の学派のセラピストとしてコメントを行っているのは、村瀬嘉代子氏（統合的心理療法学派）、乾吉佑氏（精神分析学派）、山中康裕氏（精神科医・ユング学派）である。事例Bは、秋田澄子氏と9歳男児のクライアントM君によって行われたプレイセラピーである。不登校となり来談し、全7回を経て終結している。この事例は、セラピストが学校に付き添ったり自宅に行ったりする対応がみられ、面接室の中でのみ行う心理療法と異なる特徴を持つと言える。他の学派のセラピストとしてコメントを行っているのは、小此木啓吾氏（精神科医・精神分析学派）、樋口和彦氏（ユング学派）、佐治守夫氏（ロジャーズ学派）、武田建氏（行動療法）である。なお、匿名性を保つために、通常的事例報告においてはイニシャルを連想させるようなアルファベット表記を行わないことになっているが、今回は文献での表記のまま使用した。

3) 分析方法

（1）分析する記述の抽出

2事例を熟読したのち、事例ごとに分析を行った。まず、全てのセラピストの当該事例に対する考察・コメント部分を対象とし、そのうち、「着目したエピソード」が書かれている部分に波線を、「セラピストの考えた事柄」が書かれている部分には棒線を引いた。例えば、事例Aの「野球ゲームのピッチャーとバッターは、二者関係でのコミュニケーションを意味しているであろう」という記載を例に挙げると、「野球ゲームのピッチャーとバッター」という部分が、波線を引く対象の「着目したエピソード」の部分となり、「二者関係でのコミュニケーションを意味しているであろう」という部分が、棒線を引く対象の「セラピストの考えた事柄」となるといった形である。次に、波線が引かれた「着目したエピソード」に対応する、担当セラピストによる事例報告の中の記載（以降、「事例にみられる事実表記」とする）を探し、ケース・マトリックスの左端に順に書き出していった。続いて、それぞれの「事例にみられる事実表記」

の右側の列に、セラピストごとに「セラピストの考えた事柄」を並べて配置し、それらに対応させるケース・マトリックスを事例ごとに作成した(表1, 表2)。なお、このケース・マトリックスとは、質的研究の方法の一つであり、一つの切り口や視点に沿って複数のプロセスを検討する際に有効とされている(岩壁, 2010)。

なお、今回は倫理的な配慮として、ケース・マトリックス内の事例の記載については、要点のみを抜粋したものと文献内の記載ページを書くにとどめている。また、セラピストの考察・コメントについても、最初と最後を明示したうえで、中間の記載は省略してまとめている。

また、今回は紙面の都合上、1名のみが着目したエピソードへの検討と表への記載は割愛する。その都合上、表の「番号」の欄のうち1名のみが着目したエピソードの番号は欠番とする。

(2) 分析1—セラピストの視点の共通性に関する数量的な検討

ケース・マトリックスを基にして、事例ごとに次の二つの観点から数量的な検討を行った。

1 「着目したエピソード」について

考察・コメントに書かれた「着目したエピソード」の部分と対応する、実際の事例報告の事実表記の部分である「事例にみられる事実表記」の欄は、セラピストが事例のプロセスを読んでいく際に、注目する箇所であり考察の根拠とする箇所であると考えられる。そこで、この「事例にみられる事実表記」を対象として、数量的に検討を行った。

まず、「事例にみられる事実表記」の総数をカウントした。続いて、ケース・マトリックスの行に目をやって横に対応させながら、「事例にみられる事実表記」のうち複数のセラピストが共通して着目し何らかの考察をしている箇所を、セラピストの人数ごとにカウントした。

2 「セラピストの考えた事柄」について

考察・コメントに書かれた「セラピストの考えた事柄」は、その事例のプロセスについて、セラピストの読み取りの視点があらわれる箇所と考えられる。そこで、この「セラピストの考えた事柄」を対象として、数量的に検討を行った。上記の「事例にみられる事実表記」の行において、2名以上のセラピストが共通して着目した「セラピストの考えた事柄」を対象とした。

手続きとしては、まず「セラピストの考えた事柄」にあらわれる事例のプロセスの読みや視点がケース・マトリックスの行ごとに一致していると思われるものには○を、異なるものには×を、全員ではないが複数間で一致していると思われるものには△をつけた。今回は筆者以外にも、臨床実践に携わるセラピスト1名に判定してもらい、判定が一致しなかった箇所は一律に△とした。その総数を算出したのち、事例概要に関する記載部分と、事例のプロセス自体に関する記載部分(事例Aは引継ぎの回から、事例Bは1回目から含めることとした)とにわけ、その数の内訳を算出し、○、×、△の割合に差があるかを検討するために統計処理を行った。

(3) 分析2—事例のプロセスに関する質的な検討

分析1で行った数量的な検討に加えて、事例のプロセスについて質的な検討を行った。ここでは、「心理療法の過程ではどのようなことが生じているのか」を検討するために、プロセスをメタ的に分析した。今回の分析対象は2事例のみであるが、複数のセラピストの考察をメタ的に分析し、共通性のあるものをまとめていくという手法は、岩壁・小山(2002)の指摘する事例のメタ分析の考え方と類似するものであると考えた。

そこで、事例ごとに複数のセラピスト間で考察が一致した箇所(○の箇所と△のうち複数間

で一致していると判断された箇所)を1単位のコードとして取り上げて分析の対象とし、その内容を表すカテゴリ名をつけた。続いて、それらのカテゴリを事例のプロセスを追って順に並べて、ストーリーラインを作成した。また、両事例のカテゴリを比較し、共通するカテゴリをまとめた大カテゴリを生成した。

なお、本来のメタ分析の手順であれば、各カテゴリを構成する記述が集まり、質と数に安定がみられるまで事例を増やして分析するべきだが、今回は2事例のみでの検討としたため、複数のセラピスト間で共通した考察をカテゴリとしてまとめ、2事例間で共通したカテゴリをさらに大カテゴリとしてまとめるという手順をメタ的な分析と考えることとした。以下に示す結果は、この2事例についての言及であるということを本研究の限界としておきたい。

4. 結果

1) 分析1—セラピストの視点の共通性に関する数量的な検討

(1) 事例A

1 「着目したエピソード」について

まず、「着目したエピソード」に対応する「事例にみられる事実表記」は全部で44個であった(a-18は対応する事実表記がみられないものであった)。そのうち、複数のセラピストが共通して着目し、何らかの考察をしている「事例にみられる事実表記」の個数をカウントした結果、4名全員が着目した個数は3個、3名では8個、2名では10個、1名では23個であった。全体44個のうち、複数のセラピストが着目した個数は計21個であったことから、セラピストが一人でも着目した事実表記のうちの48%は共通のものであると言える。さらに、この21個は文献の140行分の事実表記であり、これは当該事例報告全体である583行の24%であった。

2 「セラピストの考えた事柄」について

2人以上のセラピストが共通して着目した事実表記21個のケース・マトリックスの行をみていった。そこでの「セラピストの考えた事柄」の内容の読みや視点が一致していると思われるものには○を、異なるものには×を、全員ではないが複数間で一致していると思われるものと評定者間でずれが生じたもの(a-12, a-15)には△をつけた。その結果、○が6個、×が7個、△が8個であった。そのうち、事例概要に関する記載部分では、○が3個、×が1個、△が0個(占める割合は、順に75%, 25%, 0%)であった。事例のプロセス自体に関する記載部分では、○が3個、×が6個、△が8個(占める割合は、順に18%, 35%, 47%)であった。Fisherの直接検定を行ったところ1%水準で有意な差がみられ($p=0.000$)、残差分析の結果から、事例概要部分の方が事例のプロセス部分よりも、1%水準で○が多く△が少ないという結果であった。

(2) 事例B

1 「着目したエピソード」について

まず、「着目したエピソード」に対応する「事例にみられる事実表記」は全部で38個であった(b-39, b-40, b-41, b-42は、対応する事実表記がみられないものであった)。そのうち、複数のセラピストが共通して着目し、何らかの考察をしている「事例にみられる事実表記」の個数をカウントした結果、5名全員が着目した個数は1個、4名では3個、3名では9個、2名では11個、1名では14個であった。全体38個のうち、複数のセラピストが着目した個数は計24

個であったことから、セラピストが一人でも着目した事実表記のうちの 63%は共通のものであると言える。さらに、この 24 個は文献の 128 行分の事実表記であり、これは当該事例報告全体である 351 行のうちの 36%であった。

2 「セラピストの考えた事柄」について

2 人以上のセラピストが共通して着目した事実表記 24 個のケース・マトリックスの行をみていった。そこでの「セラピストの考えた事柄」の内容の読みや視点が一致していると思われるものには○を、異なるものには×を、全員ではないが複数間で一致していると思われるものと評定者間でずれが生じたもの (b-4, b-5, b-24) には△をつけた。その結果、○が 3 個、×が 11 個、△が 10 個であった。そのうち、事例概要に関する記載部分では、○が 1 個、×が 1 個、△が 2 個（占める割合は、順に 25%, 25%, 50%）であった。事例のプロセス自体に関する記載部分では、○が 2 個、×が 10 個、△が 8 個（占める割合は、順に 10%, 50%, 40%）であった。Fisher の直接検定を行ったところ 1%水準で有意な差がみられ ($p=0.000$)、残差分析の結果から、事例概要部分の方が事例のプロセス部分よりも、1%水準で○が多く×が少ないという結果であった。

2) 分析 2—心理療法のプロセスに関する質的な検討

まず以下では、事例ごとに、「心理療法の過程ではどのようなことが生じているのか」という分析テーマに沿って、ストーリーラインを示した。その後、事例間で共通したカテゴリを大カテゴリとしてまとめ、再度ストーリーラインを作成した。なお、文中のカテゴリを【】、大カテゴリを《》とし、カテゴリ間および大カテゴリの関連がわかるように図示をした (図 1)。

(1) 事例 A

まず、心理療法にやってくるまでのクライアントについて、セラピストは次のように理解をする。生後 8 カ月で麻酔なしの手術を受け、1 カ月ほど目が見えない状態にあったクライアントの幼少期の体験を、母親との一体感がはく奪され外界が突如変化する怖い体験であったのだろうと、【a-1 外傷体験】として理解する。また、言葉を覚えるのが遅く自分だけの言葉をしゃべることからは、【a-3 内へ内へとももる在り方】があり、それを捉えきれなかった【a-5 周囲の理解とのズレ】の可能性があったと捉えている。

心理療法の場にやってきたクライアントが、セラピストと出会う場面では、【a-10 セラピストがクライアントの世界に波長をびたりと合わせる】ことが生じる。このような関係性の中で、徐々にクライアントは自分のルールで遊びを展開するようになり、【a-16 受け身から自分で動き出す】ことがみられるようになる。これは、これまでの内へ内へとももる在り方からの変化とも捉えられる。さらに、家族人形を用いて赤ちゃんの世話をしたり、少年へと成長させていったりする遊びの展開からは、【a-28 内的な成長のテーマ】が示唆される。また、ブロックを用いて家を作る遊びの展開からは、【a-30-32 内的な境界のテーマ】が示唆され、自らの内面を支える守りが生じてくる。このような中で、力をつけてきたことや周囲との関係が良好になってきたことなどから、セラピストは【a-39 終結の予感】を抱く。さらに、クライアントの方からも大きなうちをしてセラピストに見せることが生じ、これがセラピストへの【a-41 贈り物としてのうんち】であると考えられ、終結の運びとなる。そして、最終回ではこれまでも行われてきた線路の遊びが展開され、二つの列車が異なる道へと別れていく表現から、【a-44 内

的な分化のテーマ】が読み取られる。そして、終結に至る。

（２）事例B

まず、心理療法にやってくるまでのクライアントについて、セラピストは次のように理解をする。父親を怖がる一方で、拘置所に入所中の叔父は好きであるという情報から、父親への同一化ができず、一家の悪の部分を担当叔父に同一化するという【b-2 悪の部分を担当する在り方】を読み取って理解している。

心理療法の場にやってきたクライアントがセラピストと出会う第一回目では、【b-9 セラピストがクライアントの世界にびたりと合わせ受容する】関わりが生じる。その中で、クライアントは【b-9 自分からしんどさを表現する】ことがみられる。そのような関係性の中で、父親のことを得意気に語ったり描いたりして、【b-17 内的な父親イメージの変化】がみられ、立派で頼もしい父親像がクライアントの中に定位されるようになってくる。これは、父親への同一化ができなかった在り方からの変化とも考えられる。さらに、潜水夫の魚獲りの遊びでは、価値ある存在として認められるという、【b-18-19 内的な成長のテーマ】が生じる。その後、現実場面でも、母とのやりとりの中で反抗ができるようになり、【b-20 力をつけてきている】ことが窺われる。さらに、潜水夫兄弟が、互いが互いを助け合うという遊びが展開され、【b-21 内的な対象関係】に新たな動きが展開される。そして、道を作り、バス、自動車、トラックなどを用いた遊びが展開され、【b-22 内的な出発のテーマ】が展開し、セラピストを連れて実際に学校に行こうとする。だが、学校が近づくにつれて顔面蒼白となる様子からは、セラピストが【b-25 クライアントの辛さを理解する】こととなる。その後、クライアントが自ら、実は父親と厳しいY先生が重なって感じていたのだとセラピストに語り、クライアントの中で【b-32 父親イメージの分化】が生じてくる。その次の回で学校に行くことができ、終結となる。

（３）両事例の比較

両事例のストーリーラインを比較し、共通の内容を持つカテゴリ同士をまとめて、大カテゴリを生成し名前をつけた。その結果、まず《心理的な見立て》を立てながら、セラピストはクライアントを理解しようとする。特に、クライアントなりの在り方を理解しようとすると考えられる。心理療法が開始されると、セラピストはクライアントの世界にびたりと波長を合わせ、《一体感の形成》された関係性を築き、その中で《クライアントの主体的な動き》がみられるようになっていく。そして、様々な形でクライアントの《内的なテーマの展開》がなされていく。内的なテーマには、おそらく共通する多数の軸がみられると予想されるが、今回の２事例で共通していたのは、内的な成長や分化に関わるテーマであった。テーマの理解とクライアントの現状の理解についての《セラピストの理解》を行き来しながら、クライアントの内的なテーマが展開されていくと考えられ、時期が熟すと終結に至ると思われる。

5. 考察

1) 分析１—セラピストの視点の共通性に関する数量的な検討

ここでは、それぞれの分析結果から得られた結果を事例間で比較しながら検討していく。

まず、セラピストが着目するエピソードについては、どちらの事例においても、事例報告中の限られた箇所（報告全体のうち、事例Aでは24%、事例Bでは36%を占める箇所であった）

を、2人以上のセラピストが共通して着目している（一人が着目したエピソードのうち事例Aでは48%、事例Bでは63%が共通のものであった）ことが示された。ここから、長い事例報告の中でも、セラピストが共通して着目するエピソードは限られており、精度が高く一致する可能性があると考えられた。セラピストが事例を読む際に重視する点あるいは考察の根拠とする点には、共通性が高いことが示唆されたと考えられる。

また、そこから導き出されるセラピストの考察の一致率については、どちらの事例においても、事例概要の箇所での読みが一致する割合が、プロセス全体でのそれに比べて有意に高いということが統計的に示された。ここから、事例の見立てに関する箇所では、セラピストの視点が学派の違いを越えた共通性を持って存在すると考えられた。また事例のプロセスに関しては、事例Aでは△が、事例Bでは×が有意に多くみられた。今回の検討からはその理由は明らかにできなかったが、比較したセラピストの人数の違いや事例の展開の仕方など、様々な要因が絡んでいる可能性がある。だが、両事例ともプロセスが展開するにつれて、セラピストの視点が全員で完全に一致することは少なくなってくるという点では共通していると言え、そこにはそれぞれのセラピストの見方や理論などの違いが影響している可能性が考えられる。

以上から、数量的な検討からは、事例報告の中でセラピストが着目するエピソードは高い精度で共通性がみられること、また着目したエピソードから構成される考察についても、見立てに関する事例概要の箇所では共通性がみられることが示唆された。特に、現実的な問題、クライアントの言動、これまでの在り方、家族の状態などから、クライアントにとっての心的意味を読み取る点での共通性がある。これは、見立てに関わる視点が、学派に関係なく心理臨床家に共通する専門的な視点である可能性が示唆されたと言えるだろう。

2) 分析2—心理療法のプロセスに関する質的な検討

ここでは、主に大カテゴリを参考に、心理療法の過程で生じていることについて考察する。

まず、今回両事例とも保護者の面接が併行してなされていたように、心理療法開始時もしくは初期の頃に、セラピストはクライアントの置かれている状況や現在の状態、これまでの生育歴などを聴取するアセスメントを行うことが一般的である。それらの情報から心理的な見立てを立て、クライアントの在り方を理解しようとする。このような理解は、クライアントの問題を理解し今後の見通しや方針を立てることにつながるとともに、セラピストがクライアントの世界を理解し寄り添うことが可能となるために必要であると考えられる。今回の事例でも、セラピストは第一回目からクライアントの世界を理解し、まるで一体となっているかのように同調性を保っている。このようなセラピストとクライアントの同調については、定量的な研究でも着目されている。前田ら（2007）によれば、実験的に行ったカウンセリング場面のうち、質が高い事例では、セラピストとクライアントの間の身体動作が同調し、かつセラピスト側がクライアントの身体動作に影響を強く受けることが示されたと言う。ここから、セラピストは身体次元からクライアントに同調性をみせしていると示唆され、今回みられた初期のセラピストとクライアントとの関係性の結果も併せると、この「同調性」はプロセスの理解において重要な点となる可能性があると思われる。

また、その関係性の中で主体的な自分が動き出すことが心理療法のプロセスにおいて、重要な展開であった。心理療法とは、自从来談するクライアントを対象とするために、主体性が根

本的に重要となってくる。この主体性について河合（2013）は、心理療法の場合はクライアントが自分で主体的に語っていき、自分で解決を見出していくことになる一方で、逆説的に言えば、主体的であればあるほど、イメージや無意識の流れに自分をゆだねることになるとも言う。今回の事例のプロセスでも、クライアントである子どもたちは意識的に問題を語っていたのではなく、無意識の流れに沿って自由に振舞い遊びを展開できたことで、様々な内的なテーマが動いていたということになっていたのである。この「主体性」の動きもまたプロセスをみる際の重要な視点と言えるだろう。

そして、心理療法が深まるにつれて、様々な形でクライアントの内的なテーマが展開されていく。おそらくここには多数のテーマがあると予想されるが、今回の検討では内的な成長のテーマがみられ、新たな自分を再構成していくといったプロセスが展開されていたと考えられる。また、もう一つのテーマとしては、これまで一体であったセラピストとクライアントとの分化、あるいは父親のイメージと怖い先生のイメージとの分化というプロセスも展開されており、終結の前に展開をみせていたことが特徴的であった。このように、内的なテーマの展開は個別性ととともに普遍性もあると考えられる。ここで、どのようなことが起こり、セラピストはどのように関わるのか、この点は今後さらに事例数を増やして検討していくべきところである。

3) プロセス研究のための新たな可能性や展望

今回の検討の第一の目的である、セラピストの視点はどの程度及びどのような面で共通性を持つかに関しては、いくつかの方向性が明らかにされたのではないかと考えられる。心理療法は個別性の高いものであると指摘されるが、今回の結果からセラピスト間および事例間で共通する、普遍性が存在する可能性が示唆されたと言えるだろう。特に、事例報告の中で着目するエピソードを選択する視点と、事例概要からクライアントの見立てを考える視点には共通性があり、それはセラピストの専門性の一つではないかと考えられる。

また、これらの共通性をもった視点から、事例のプロセスをメタ的に検討する試みを通して、第二の目的である、心理療法の過程で生じていることに関しても、興味深い観点が示唆されたと考えられる。数量的な検討ではセラピストの視点の一致度が低かったが、質的な検討を行った結果からは、共通性をもって展開される部分があることも示された。特に、臨床的な見立ての視点、クライアントとの一体的な関係性の構築、クライアントの主体的な動き、内的なテーマの展開と現状についてのセラピストの理解といった観点がみられた。これらは、今後複数の事例研究をもとにメタ分析を行う際に着目する観点ともなると考えられる。

今回のプロセスの結果は、この2事例のみにしか言及できないものであるが、今後事例数を増やした検討を行うためのパイロットスタディとしては意義があると考えられる。

6. 本研究の限界と今後の課題

今回セラピストの視点を切り口にして、心理療法のプロセスを読み取る試みを行ったが、この方法はクライアントとセラピストの心の動きがあらわれていく心理療法について、そこで何が生じているかを考えていく際の手段の一つとして有効である可能性が示された。しかし今回は2事例の検討のみ、さらにはプレイセラピーのプロセスのみから得られた示唆であるため、これらの結果が他の事例でも同様にみられるかということを今後検討していく必要があると言

え、公刊された文献以外にも様々な事例をメタ的に分析していくことが可能と思われる。

文献

- 藤原勝紀 (2004). 事例研究法. 丹野義彦 (編). 臨床心理学全書 第5巻 臨床心理学研究法. 誠心書房, pp.19-18.
- 岩壁 茂・小山充道 (2002). 心理臨床研究における科学性に関する一考察. 心理臨床学研究, **20** (5), 443-452.
- 岩壁 茂 (2010). はじめて学ぶ臨床心理学の質的研究. 岩崎学術出版社.
- 河合隼雄 (1981). 臨床心理学におけるケース研究. 臨床心理ケース研究1. 誠信書房.
- 河合隼雄 (1990). 事例に学ぶ心理療法. 日本評論社.
- 河合俊雄 (2013). 心理療法という場と主体性. 河合俊雄 (編). ユング派心理療法. ミネルヴァ書房.
- 前田恭兵・長岡千賀・小森政嗣 (2007). カウンセラーとクライアントの身体同調傾向—心理カウンセリングビデオの解析— 信学技報, **49**, 13-18.
- 永山智之・小山智朗・小木曾由佳・土井奈緒美・木村智草・白木絵美子・桑原知子 (2013). わが国における「発達障害」への心理療法的アプローチ. 心理臨床学研究, **30** (6), 796-808.
- 高嶋雄介・須藤春佳・高木 綾・村林真夢・久保明子・畑中千紘・重田 智・田中史子・西嶋雅樹・桑原知子 (2008). 学校現場における事例の見方や関わり方にあらわれる専門的特徴—教師と心理臨床家の連携に向けて— 心理臨床学研究, **26**, p.204-217.
- 氏原 寛 (1995). カウンセリングはなぜ効くのか—心理臨床の専門性と独自性—. 創元社.
- 山川裕樹 (2014). 心理臨床学における方法論としての事例研究法——事例からの視点生成に着目して——. 京都大学博士論文.

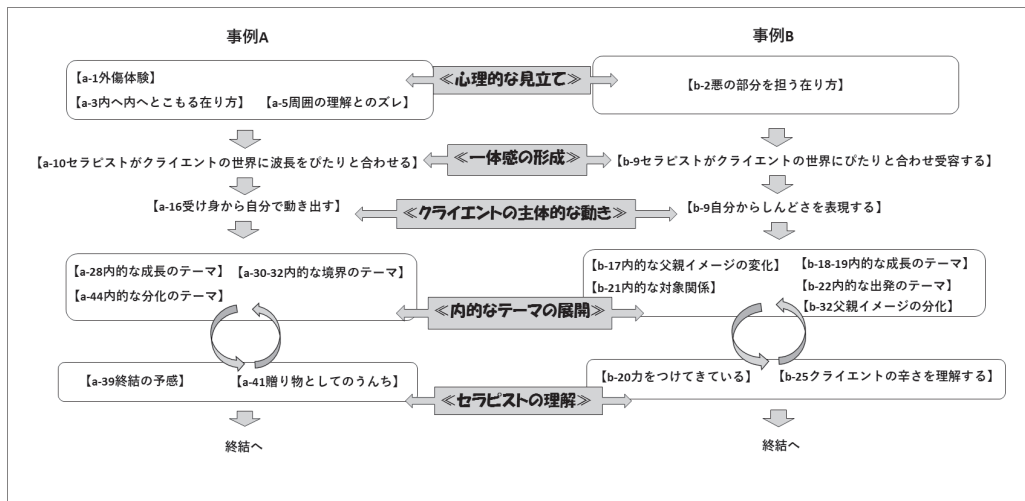


図1 事例のプロセス結果図

表1 事例Aのケース・マトリックス

– 37 –

表 2 事例 B のケース・マトリックス

[illegible]

(心理臨床学講座 博士後期課程 2 回生)

(受稿 2016 年 9 月 9 日、改稿 2017 年 1 月 11 日、受理 2017 年 1 月 12 日)

事例研究のメタ的分析の試み

—複数セラピストの視点の共通性と心理療法プロセスのよみ方に着目して—

鈴木 優佳

本稿では心理療法のプロセスについて検討するために、複数の異なる学派のセラピストが同一の事例を読んで考察をした公刊事例を分析対象として、セラピストの視点に関する共通性の検討と事例プロセスのメタ的な分析を行った。その結果、まずセラピストの視点に関して、事例報告の中で着目するエピソードを選択する視点と、事例概要からクライアントの見立てを考える視点には共通性があり、セラピスト間および事例間で共通する普遍性の存在が示唆された。次に、事例のプロセスについては、臨床的な見立ての視点、クライアントとの一体的な関係性の構築、クライアントの主体的な動き、内的なテーマの展開とセラピストによる理解といった共通性をもって展開される部分があることが示唆された。この結果は2事例のみの検討に基づくものでしかないという限界もあるが、今後事例数を増やした検討を行うためのパイロットスタディとしては意義があると考えられる。

An Attempt at Meta-analysis of Case Studies: Focusing on Similarity in Viewpoint of Several Therapists and the Way of Understanding the Process of Psychotherapy

SUZUKI Yuka

This paper discusses the process of psychotherapy. Analysis was performed based on published case studies by therapists of different orientations. First, the similarities in the viewpoints of therapists were analyzed. Second, a meta-analysis of the case studies was performed. The results indicated a similarity of viewpoint, which involved choosing an important episode from case reports and case formulation from the case outline. These results suggested the existence of common ground between the therapists or the cases. On the other hand, the meta-analysis of the case studies suggested five similarities in the process, i.e., the viewpoints of case formulation, unity relationship between the client and therapist, self-direction of the client, the psychological theme, and the understanding of therapist. Although this suggestion has the limitation that it was based on only two case studies, it is significant as a pilot study for future meta-analyses of case studies.

キーワード： プロセス研究、事例研究のメタ分析、セラピストの視点

Keywords: Process research, Meta-analysis of case studies, Viewpoint of therapist

